

## 世界に通じるとは何か

受川史彦

数理物質科学研究科助教

世界に通じる学生を育てるための戦略との題目を頂いたが、そもそも世界に通じるとは何を意味するのかを考えてみたい。推測するに筑波大学の学生・卒業生あるいは一般に日本の大学で学んだ学生が「国内では通用するが世界では通じない」という仮定あるいは概念が前提としてあると思われる。これは真であるか？ つまり日本国内では活躍しあるいは評価されても国際的にはそうではないということがあるのか？ 個々の事例ではそれはもちろん存在するであろうが、一般的に成り立つ真理であるかと問われればはなはだ疑問であるというのが私の意見である。

そもそも外国人（筆者が直接の接触のあるのは主に米国人であるが）は日本のことなど何も知らないのである。あるいは興味がないのである。彼岸から正当な評価などできるはずがないのであって、よしんば低い評価を受けたとしてもそんなものは放っ

ておけばよろしい。

より現実的な問題は、我々が彼らの土俵に上らねばならない場合であろう。たとえば大学院を修了した後にかの地で研究職に就いたとして、そこで十分な活躍ができるか。答えはもちろん「可能」である。それでは、日本国内では活躍していたあるいは活躍が期待されたにもかかわらず、世界では通用しないということがあろうか？ これに対する答えは「否」である。もちろん個々の事例はさまざまであろうが、一般に成り立つ真理であるとは到底思えない。少なくとも筆者の専門とする分野においては。

たとえば、言語の問題があろう。かの地ではそこでの言語あるいは英語を用いる必要に迫られるであろう。一般に日本で教育を受けた者は外国語をしゃべることがあまり得意ではない。しかしながら重要なのは行っている研究の内容の質であって、それを口頭で発表する際の見かけの巧拙ではな

い。もちろん発表のしかたは重要であって、内容を正確にかつ理解しやすく伝達することに努力し、周到に準備することは必要であるが、ここでは提示の仕方の巧拙というよりむしろ相手に理解させようという熱意が重要であって、外国語が一般に不得手であることあるいは我々が彼らの言語を母国語とはしていないことが決定的な要因とはならない。最も重要なのは伝達に値する内容と質を持っているかどうかである。したがって、おのれの研究の充実に励むべきであり、もしそれが国内で評価される水準のものであるならば、当然世界に通じるはずである。

もし通じないとしたら、その質に対する評価の基準を振り返る必要がある。少なくとも自然科学においては真実は普遍であり不変である。自然の法則は宇宙のどこにおいても同じである。そしてその法則は、後になってそれ自体を含むより一般的・基本的な法則が見出されるということはあっても、法則が去年と今年で異なるなどということはない。したがって、国内で評価されるものが世界に通じないということはあるわけである。もしあるとすれば、それは研究が述べているところの命題の真偽を問題としているのではなくて、研究の質の基準がむこうとこちらで異なっているという場合である。つまり井の中の蛙である。

あるいは global standards の水準に達していないということである。情報伝達の手段が高度に発達した現在においてはこのようなことがあろうとは思えないが、もし存在するならばそれは学生の責任ではなくて、我々研究者の側の問題である。世界に通用しない教員からどうして世界に通用する学生が生まれるであろうか？ よって、我々は我々の研究の質を高めることに邁進すべきである。

以上極めて抽象的な議論を展開してきたので、ここからはこれから海外に出て勝負しようという若者に向けて具体的な方策を伝授したい。世界に通じるためにすべきことは以下の通りである。

1. 寡黙はいけぬ。自分でよく理解していないことでも決してわからないなどいってはいけない。議論に割って入り、口を挟むべきである。その際、自分の述べていることが的を得ているか否かは問題ではない。重要なのは、何かを言うことであって、雄弁であるという印象を与えることである。
2. 針小棒大。ある研究に対する自分の寄与がたとえわずかであっても、あるいは零であっても、その大部分あるいはすべてが自分の貢献であるように言わねばならない。謙虚さは美德ではない。言わなくても見るべき人は見てい

てくれるなどというのは甘い考えである。

3. 機を見るに敏。まわりをよく見渡すべし。何が重要な研究課題であるかを理解すること。その際、過去の賢人が何十年もかけて解決できなかったような根源的な問題には決して取り組んではいけない。また、独創的なものを編み出そうとしてもいけない。他人が苦勞してやった研究のおいしいところを頂戴し、少しだけ味付けを変えればよろしい。

4. 自信を持つこと。その量は過剰なほどよい。自分の能力は世界一であると信じよ。その際、根拠がなくてもよろしい。あるいはないほうがよい。自信に満ちた態度を見ると人は安心するものである。そして、能力が高いと誤解してくれるやも知れぬ。

以上の点に気をつければ、世界で活躍できること間違いなしである。あなたの将来は明るい。ただ、世界で通用しても日本では通用しないことは保証します。

さて、結論は以下の通りである。

世界に通じないというのは幻想である。よって、我々は日本に通じる学生を育てることに努力すべきである。そのためには我々教員あるいは研究者が世界に通じる研究をすることが先決である。将来ある若者

に向けての具体策については、くれぐれも反論のメールなどお送りくださらぬようお願い申し上げます。

(うけがわ ふみひこ/物理学)